

## NewsLetter

Kagoshima University Library

## 南風



## 貴重書展特集

合同企画展開催

## 海を駆ける

東アジア世界の海域交流、その  
光と陰く薩摩、琉球、明・清>

期間：2010年11月6日～28日  
場所：坊津歴史資料センター輝津館  
期間：2010年12月3日～19日  
場所：鹿児島大学附属図書館

## 講演会&amp;シンポジウム

日時：2010年12月5日  
場所：鹿児島大学中央図書館

島津家関連書籍コレクションである「玉里文庫」を所蔵する附属図書館と、日本三津として海上交流史上に重要な役割を果たした坊津の貴重な資料を収集する輝津館との合同企画展が開催されました。徳永氏（黎明館学芸課長）と橋口氏（輝津館学芸員）による講演では、最新の研究成果について興味深い話があり、好評でしたので、ここにその講演要旨を紹介します。



編集・発行：鹿児島大学附属図書館  
〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35  
電話 099(285)7440 FAX 099(275)5204  
Mail: joho@lib.kagoshima-u.ac.jp  
http://reol.lib.kagoshima-u.ac.jp/~nanpu/

## 講演要旨「東アジア世界の海域交流」黎明館学芸課長 徳永和喜

薩摩藩は幕藩体制下のなかで異質・異域ともいべき地域である。そのことは、近世初期に琉球国侵攻以後の琉球支配に起因するものであり、薩摩藩による琉球支配とは別に、琉球国は独立した王国として中国を中心とする東アジア世界を構成する重要な国家であった。中国を宗主国として朝貢する琉球国での構図を利用することが、直接中国との貿易ができない薩摩藩の琉球支配の目的であり、宗主国中国が侯国琉球国に対して下賜する豊富な物資が琉球王府の財源となっていたことに着目していたからである。実質支配の薩摩藩と形式的とはいえ独立した琉球国として中国とに両属する極めて複雑な支配を受けることになったのである。

本発表の視座は、「薩摩藩の近世外交史」の中心である貿易・交流を歴史の表舞台とし、漂流民送還の実態を裏舞台として東アジア世界に展開されたルールとルートの存在を明らかにすることによって東アジア（中国・朝鮮・琉球・薩摩・日本）海域交流の全体像を掌握しようとするものである。

## 1. 島津氏の国際貿易構想

島津貴久が伊集院一宇治城から鹿児島御内城に入ってきたのは1550年。1561年の耶穌会印度区長宛貴久書翰に「我が国に彼等の来ることを喜び」・「貿易の爲め彼等が予の国に来ることは喜ぶべし」・「予が心は海岸に出て彼等の来るを待てり」と、いかに貴久がポルトガル船をはじめとする外国船の来航を期待したかを示す史料である。貴久にみる貿易の重要性認識は伊作島津家が本家島津を継承する要因ともいえる一貫した政治姿勢であった。貴久に続く義久は、山川港を1583年直轄港化し、法令「条々」を發布して「唐土・南蛮船」来航時の貿易活動を公権力として保護・促進する自由貿易を標榜した。続く家久は1603年「唐船着津二付被仰出条々」を発令して外国船貿易理念を示し、押売・押買の禁止と違反者の処罰、「須知」では貴賤による差別の禁止・権力行使の禁止、外国商人穀物要請には官庫抛出とする貿易条件の整備に努めるとともに、唐船奉行を設置し、円滑な貿易促進を制度的にも完成させていった。

## 2. 朱印船貿易

朱印船貿易は日本商船が積極的に東南アジア各国との貿易を展開し、各国に日本人町を形成したことで知られる日本の大航海時代であった。この朱印船貿易は近世大名と大商人によって経営され、その近世大名のなかで最大の朱印船貿易家が島津氏であったことはあまり知られていない。加えて、異国渡海朱印の許可状の書式は島津氏が発給した琉球渡海朱印状であることはほとんど知られていない。島津氏の朱印状受給や貿易形態や経営について紹介した。

## 3. 琉球口貿易

江戸幕府の外交政策を鎖国と呼び、長崎が唯一の開港場といわれるが、それは不適切である。正確には、宗氏の対馬口・島津氏の琉球口・蠣崎氏の松前口貿易口を加え、四つの貿易港が存在していた。琉球口輸出品の昆布は幕府と競合したこと、輸入品光明朱の国内販売経路を史料で検証した。

以上が、幕府の閉鎖的外交政策に至る過程のなかで島津氏・薩摩藩は積極的に海外貿易を展開し、幕末まで貿易は続いたのであった。これが幕末薩摩藩の討幕資金や海外情報入手の役割を担っていた。後半は、東アジア世界にみられた漂着民送還の実態について紹介する。

## 4. 薩摩藩の朝鮮通詞体制—幕府の漂着民送還規則

漂着民に対応する幕府の命令が全国に発令されたが、唯一薩摩藩だけに朝鮮通詞・唐通事の体制がみられる。薩摩藩はなぜ朝鮮通詞・唐通事制度を堅持しよう

としたのが最大の課題であるが、その基礎作業としての朝鮮通詞の役料・職階や制度的完成をみていく。

##### 5. 朝鮮の漂着民送還体制、6. 送還ルールとルート

漂着民はすべて長崎に送遣し、それぞれの本国に送還することが幕府の規定となっているが、薩摩藩領奄美群島は別扱いであった。奄美群島は琉球国所属とされ、同地に朝鮮船が漂着すると、奄美→琉球国→中国→朝鮮、このような宗主国・侯国との東アジア世界の秩序による送還がみられる。この東アジア世界の送還ルートとルールは薩摩藩の特異性に起因するものであることを検証した。

### 講演要旨「モノから見た薩摩・坊津の対外交流史—貿易陶磁を中心に—」輝津館学芸員 橋口亘

薩摩・大隅各地の中世遺跡では、中国陶磁を中心とした海外産貿易陶磁が豊富に出土し、陶磁器食膳具（碗・皿等）の大部分、調理具や貯蔵運搬具（壺・甕等）の一部が中国陶磁によって占められる。

青磁では、浙江省龍泉窯系の製品を中心に、古くは、浙江省越州窯系、福建省同安窯系の製品等が受容されている。白磁では、江西省景德鎮窯系や福建省系の製品等がみられる。青花・色絵磁器等については、江西省景德鎮窯系、福建・広東省系の製品（福建省漳州窯の製品等）がある。このほか、黄釉鉄絵盤や鉢などの福建省系の陶器類、河北省磁州窯系陶器、中国南部産の褐釉陶器壺・甕、福建省産の天目碗、三彩・緑釉等、多様な製品が出土する。

東南アジア産の陶器では、タイ産褐釉壺をはじめ、ベトナム産の鉄絵・青花・焼締陶器等が、また朝鮮半島の製品としては、象嵌青磁等が確認される。

上記したような、多種多様な陶磁器は南九州の人々の生活を彩ったわけだが、これら貿易陶磁の豊富な流入からうかがわれる海外交易の隆盛は、海外と日本中央部を結ぶ物流の中継地であったこの地の人々に、地元での輸入品消費にとどまらない様々な面で、多くの利益をもたらしたと考えられる。

応永17年（1410）、島津元久上洛時の「進上物注文」（『日記雑録 前編二』800）には「染付鉢」・「壺」・「茶碗皿」等の名が見え、当時こうした陶磁器が贈答品として利用され、島津氏から中央政界へもたらされていたことがわかる。

近世に入ると、近世的権力のもとで薩摩藩領内における鹿兒島地域（鹿兒島城・鹿兒島城下）への一極集中が本格的に始まり、鹿兒島地域の遺跡群の出土遺物の内容が、領内他地域（外城部）のそれを圧倒していく。貿易陶磁の優品も鹿兒島地域での出土例が目立つようになる。中世に豊富な貿易陶磁の流入が見られた薩摩・大隅地域であるが、近世初頭に開始した在地での陶磁器生産を推し進め、その結果、在地生産品の比率が高く、保守的・閉鎖的な傾向の強い陶磁器流通が展開されることになる（このような傾向は、流通の垣根ともいえる藩の解体により、他地域産の陶磁器が豊富に流入し、在地産陶磁器のシェアを奪っていくようになる近代初頭頃まで続く）（橋口2002）。

しかしながらその一方で、近世を通じて続けられた琉球口貿易や、外国船漂着等の問題からは、薩摩が対外的な物流の中継地としての役割を完全には失っていなかったことがうかがわれる。

そのことを示す考古学的事象の一つに清朝陶磁器の出土様相が挙げられる。薩摩の近世遺跡における出土陶磁器

は、九州産の陶磁器を主体とするが、鹿兒島城下の遺跡を中心にしばしば清朝磁器の出土が確認される。その内容は、景德鎮窯系の青花・色絵、福建省徳化窯系の白磁・青花・色絵、福建・広東省系の粗製青花（印青花含む）など多種に及ぶ（橋口1999・2009）。このような薩摩における清朝陶磁器の出土様相は、沖縄での清朝陶磁器の出土様相（大橋1995・新垣2003・2010）の延長上にあると考えられ、いわゆる「鎖国」体制下でありながら、琉球口貿易や唐船漂着などの諸事情を抱えた薩摩藩の海外への開放性を反映したものであると捉えられる。

こうした中・近世貿易陶磁の豊富な出土は、単に国外産品の到来という受身的意味にとどまらず、東アジアの海を股にかけて活躍した薩摩の人々の主体的な活動の記憶とも言え、まさに海に開かれた薩摩を象徴する事象として評価できる。

#### 【引用・主要参考文献】

- 新垣力2003 「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要 沖縄埋文研究』No.1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力2010 「沖縄から出土する17～19世紀の貿易陶磁器」『海の道と考古学』高志書院
- 上原兼善1981 『鎖国と藩貿易』八重岳書房
- 大橋康二1995 「九州における明末～清時代の中国磁器」『青山考古』No.12 青山考古学会
- 大橋康二・山田康弘1995 「鹿兒島県鹿兒島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.15 日本貿易陶磁研究会
- 重久淳一2004 「鹿兒島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『シンポジウム 陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器』東南アジア考古学会
- 新田栄治1999 「近世薩摩出土の東南アジア陶磁と薩摩の海外活動」『海洋国家・薩摩—薩摩に鎖国はなかった』鹿兒島県歴史資料センター 黎明館
- 橋口亘1999 「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』No.19 日本貿易陶磁研究会
- 橋口亘2002 「鹿兒島県地域における16世紀～19世紀の陶磁器の出土様相」『鹿兒島県地域史研究』No.1 『鹿兒島地域史研究』刊行会
- 橋口亘2004a 「中世港湾坊津小考」『中世西日本の流通と交通』高志書院
- 橋口亘2004b 「中・近世の薩摩と貿易陶磁」『海が薩摩にもたらしたもの』尚古集成館
- 橋口亘2009 「近世薩摩における中国陶磁の流入—清朝磁器を中心に—」『から船往来』中国書店